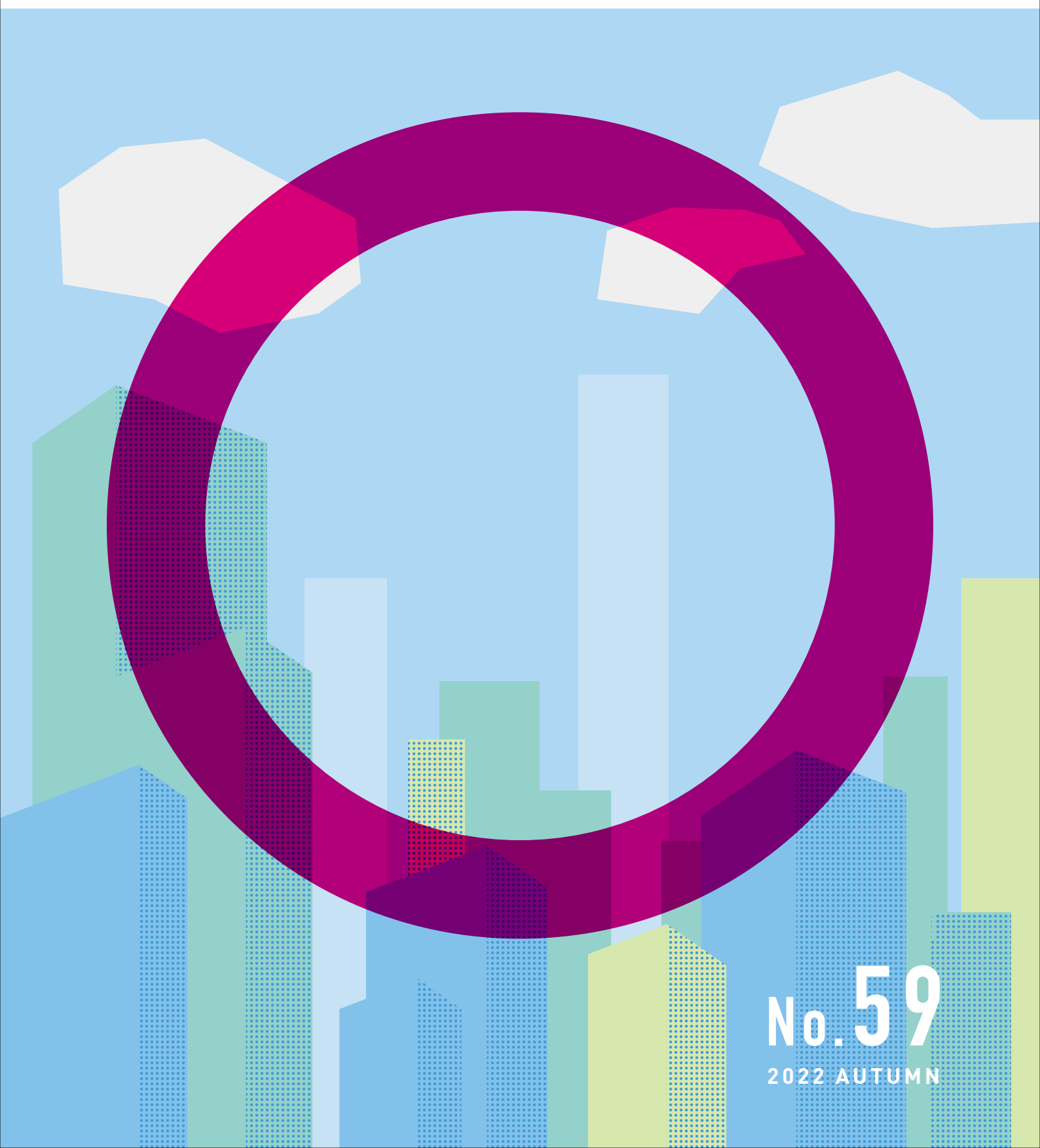


GAKKAN

Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo



No. 59
2022 AUTUMN

東京大学での47年

——これからの若い皆さんへの言葉—— 吉見俊哉 教授

社会学がご専門の吉見俊哉先生が2023年3月末に定年を迎えられます。1976年に入学されて以来、47年間を東京大学で過ごしてこられました。

旧新聞研究所時代から今日まで情報学環とともに歩まれた吉見先生は、情報学環長、大学副学長を歴任されながら、精力的に研究活動を進められました。

ご退職の前に、これまでの研究生生活の一端を伺い、研究者を目指す若い皆さんへのメッセージをいただきました。



——先生は駒場の教養学部のご出身ですね。
学生頃のお話をお聞かせください。

入学当初、私の学生生活の最大関心事は、勉学ではなくて演劇であり、そして都市でした。私は演劇青年で、駒場にいた頃は演出家の如月小春さんの劇団と一緒にやっていました。その演劇との出会いが、学問をやるうというふうにした最大のきっかけです。

——演劇から学問に。どのような道筋が見えたのでしょうか？

演劇は、同じ台本を同じ役者が何度も上演しますが、観客や役者の微妙な絡みなどの違いで毎回違うドラマが成立します。同じ言葉を同じ身体が演じながら、そこに違うドラマが成立していくということは、すごく面白いと思いました。言葉と身体と場所、他者のまなざしがどのような関係性の中で、ドラマを成立させていくのかを考えるようになりました。そして、同じことが演劇の場だけではなく、都市や社会の中にたくさんある、都市という舞台で成立しているのは一種の演劇であると考えました。それならば、都市の中で、どのような身体、空間、言葉、イメージによってドラマが成立しているかを考えてみよう、というのが私の原点です。それまでの都市社会学とは違う都市研究を、上演論的なアプローチによって社会学の地平に出現させていくことが出来るはずだと考え、修士論文は見田宗介先生のもとで、『都市のドラマトルギー』につながる研究をしました。

——その後、新聞研究所の助手としてキャリアを始められますね。

修士論文をバージョンアップする形で『都市のドラマトルギー』が、弘文堂から出版されたのが1987年。その出版の直前に、杉山光信先生にお声掛けをいただいて、新聞研究所の助手になりました。それを機に、それまで都市と演劇で考

えてきたことの延長線上で、メディア研究へと、少しウイングを広げ、新たなフィールドを模索し始めたのです。都市の研究者であった私は、この頃から都市とメディアの社会学者になっていきます。電話の研究のほか、映画館や街頭テレビなど、街中のメディアにも取り組みました。マスメディアの時代に都市という場で、どのようにメディアと空間の関係を考えられるか。社会的な現場の中で権力と身体、あるいは人々の感受性がどう絡まり合っていくのかということを経験した中で考えてきました。また、そういった権力の問題がはっきりと見える「博覧会」「ディズニーランド」「米軍基地」などを対象にも研究を進めました。当時、自分では、そういったアプローチが、「カルチュラルスタディーズ」であるとの自覚はあいまいでしたが、1996年にスチュアート・ホールらバーミンガム大学の先生方を招いて、大きなシンポジウムを開き、カルチュラルスタディーズを真正面から日本で紹介した頃から、カルチュラルスタディーズの吉見俊哉という風にもなっていきます。

——これから研究に取り組む若い世代の人たちに、
アドバイスをお願いします。

大きく3つあります。まず「才能は執念である」。先に話した通り、上演論的アプローチによる都市研究という初期に掴んだ核心を、私は今でも持ち続けています。様々な経緯の中で、メディア研究、カルチュラルスタディーズとの出会い、大学運営への参画などが、私の人生に舞い込んできましたが、その間も、初期に掴んだ核心は変化していません。これが執念です。同時にそうして舞い込む新しいテーマが、もう一つの中心軸を成してきました。中心軸は決して一つではなく、楕円形を成す二つの中心軸が必要なのだと思います。2つ目のアドバイスは「考え込む前に話せ、話す前に聞け」です。自分の殻に閉じこもるのではなく、オープンに人の話に耳を傾けて、もう一つの中心軸を見つけたとき、その繋ぎ目に新しい言葉が、きっと見つかります。そして3つ目は「ゼロになる勇気を持つ」。これまで、積み重ねてきた研究や読書も、思い切って捨て去ることも、時に必要になるかも知れません。研究テーマ、そのものの変更になることもあるでしょう。私は多くの学生を指導してきた経験上、一度だけは、研究テーマの変更も、良いかと思っています。熟慮の上での一度です。でも二度はいけません。一度です。このことを肝に銘じてください。

是非皆さん、オープンな心、執念、さらに思い切りの良さを兼ね備え、よき研究仲間と、心を開いて話し合う、充実した研究生生活を送ってください。

※吉見先生へのインタビューのフルバージョンを情報学環ウェブサイトにて掲載予定です → <https://www.iii.u-tokyo.ac.jp/>

東京大学制作展Extra 2022 / Emulsion

2022年7月1日～4日に情報学環オープンスタジオにて「東京大学制作展Extra2022 “Emulsion”」を開催しました。今回はCOVID-19の感染拡大に配慮しての完全予約制ながら、3年ぶりの対面開催となりました。今年のコセプトである「Emulsion」は、「本来混ざり合わないはずの物質が、反発しながらもお互いを受け入れ、共存している状態をEmulsionと呼ぶ。この展示会では、各々の専門性・開催する形態・接続する次元を超えた、作者・作品・観客の出会いから新たな創造の可能性を探る。事事物物の移ろいのなかで、Emulsionは不易と流行の間に立ち、昇華する一つの視点を示せるだろうか。」という想いを込めたものです。4日間の予約枠はすべて満員となり、学内の方だけでなく、企業や他大学の方から小さなお子様まで、合計482人の方にご来場いただきました。

記事：中澤紀香(修士課程・東京大学制作展広報担当)



「ウクライナ衛星画像マップ」プロジェクト

ロシアによるウクライナ侵攻が始まった2022年2月24日以降、渡邊英徳教授は毎日、彼の地の戦況が把握できるオープンソースで入手可能な衛星画像や3Dモデルを、デジタルアースプラットフォームの「Cesium」にマッピングしています。

3Dモデルは、激戦地となったウクライナ・ドネツク州出身の19歳の青年をはじめ、レバノンやドイツなど多数の国において、破壊された街の様子的一端を独自に3Dデータ化している人たちによるものです。Twitterやコミュニティサイト経由で連絡をとりあい、彼らの協力を得ながらプロジェクトを進めています。「ヒロシマ・アーカイブ」をはじめ、これまで渡邊先生が手がけられてきたデータマッピングのように、「ウクライナ衛星画像マップ」も情報デザインのスキルが発揮され、さまざまな資料やデータを可視化し、わかりやすく伝えていきます。

記事：神谷説子(特任助教・編集部)



「講談社・メディアドゥ 新しい本寄付講座」発足記念シンポジウム

2022年5月19日、お茶の水・ワテラスコモンホールにおいて東京大学「講談社・メディアドゥ 新しい本寄付講座」発足記念シンポジウムが開催されました。2022年4月から始まった東京大学大学院情報学環と講談社、メディアドゥの3者による「講談社・メディアドゥ 新しい本寄付講座」は、2015年から2021年まで続いた「DNP学術電子コンテンツ研究寄付講座」を前身としています。本寄付講座では、日本のこれからのデジタルコンテンツ構築及びデジタルアーカイブの方向性を議論し、「新しい本」の試作とその利活用促進基盤となるものの研究・社会実装を目指します。

シンポジウムでは、吉見俊哉教授の基調講演や渡邊英徳教授の司会のもと、石田英敬名誉教授をはじめとするデジタルアーカイブに関連する各界の識者5人によるディスカッションなど、「新しい本」をめぐる活発な議論が繰り広げられました。

記事：柳 志岐(博士課程・編集部)

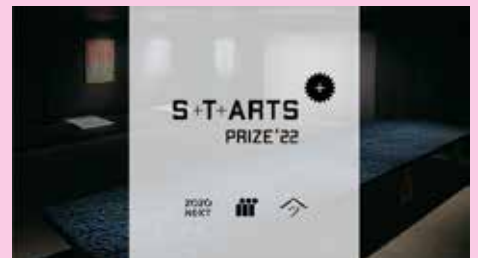


東京大学寛研究室・細尾・ZOZO NEXTの共同研究プロジェクト“ Ambient Weaving ”が「STARTS Prize 2022」栄誉賞を受賞

寛康明研究室、株式会社細尾、株式会社ZOZO NEXTの共同研究プロジェクト“ Ambient Weaving ”が、EU Commissionが主催する「STARTS Prize 2022」にてHonorary Mention(栄誉賞)を受賞しました。

2020年より開始した、伝統工芸と先端素材およびインタラクション技術を組み合わせ、機能性と美を両立する新規テキスタイルの開発に関する共同研究プロジェクトの成果物です。本プロジェクトでは、西陣織の構造や意匠に先端素材やデバイスを掛け合わせることで、周囲の環境情報を媒介する様々な機能と表現の両立を試みてきました。今回は、その伝統工芸と先端テクノロジーを組み合わせさせたユニークなプロジェクトチームとアプローチにより、表現と技術の両面において新たな美を追求したことを評価され、Honorary Mention(栄誉賞)に選ばれました。

記事：柳 志岐(博士課程・編集部)



「今更聞けない、でも知りたい! 学府生活の疑問」アンケート実施

2022年度の前半は3年ぶりに対面授業が中心となり、学環・学府の構成員がキャンパスに来る機会が増えました。しかし特に学生には実はよくわかっていないことや困りごともあるのではないかと、学環ウェブ&ニューズレター編集部は5月下旬に学府の大学院生を対象にオンラインアンケートを実施しました。

寄せられた26名からの回答には、コピー機や院生室などの設備面をはじめ、学府のポータルサイトやSlackなどのコミュニケーションチャンネルの使い方など、比較的身近なことについての疑問が少なからずありました。他にも学会参加のことやアカデミアへの就職活動について、また留学生からはビザの更新や在留資格に関する相談に関する声も聞かれました。従来はこのような学府生の「暗黙知」は、学生同士がさまざまに交流する中で共有されてきたと思われませんが、アンケート結果からは長引くコロナ禍でその共有する

機会が失われている様子が浮かび上がりました。学府に対する希望としてもっとも多かった意見は、「所属コースや研究室を超えて学生同士が繋がる機会がほしい」という趣旨のものでした。

アンケート結果をご覧くださった佐倉統専攻長は、授業以外のコミュニケーションの大切さを改めて認識したと話され、「今後はコロナの状況を見ながら、できるだけ対面の機会を増やし、みんなの暗黙知がシェアされやすい、コミュニケーションが生まれやすいような環境を作っていきたいと思います」とコメントしてくださいました。学環ウェブサイトには、今回のアンケート結果と一部の疑問へのFAQを掲載しています。

記事: 神谷説子(特任助教・編集部)



PEOPLE 着任教員自己紹介



石黒祥生
准教授

ヒューマンコンピュータインタラクション、ヒューマンオーグメンテーション、自動運転UXが専門です。特に、高度な知能機械である自動運転技術を、単に人の代わりに運転したり、移動体を使って従来のサービスを無人化したりするだけでなく、いかに人間社会に溶け込み協調するかを探究することで、全く新しい移動と価値を提案していくことに焦点をあてて研究しています。



CONGRATULATIONS

令和3年度 大学院学際情報学府 学位記授与式

2022年3月24日、学際情報学府の学位記授与式が福武ラーニングシアターで開催されました。修了者修士課程105名、博士課程24名に山内祐平学府長より学位記が授与されました。その後、山内学府長と前田幸男専攻長(当時)より祝辞が贈られました。例年式後に行われていた優秀修士論文発表会は、今年度はオンライン開催(オンデマンド型)となりました。

記事: 金子沙織(学務チーム)



学位記受取代表者の伊東謙介さん(博士・左)と
中野文哉さん(修士・右)



令和3年度学位記授与式

令和4年度 入・進学ガイダンス

2022年4月1日、学際情報学府の入・進学ガイダンスが福武ラーニングシアターで開催されました。新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、遠隔でも視聴できるよう、その様子がオンラインで配信されるハイブリッド形式となりました。オンライン参加の58名と対面での出席者62名の計120名が参加し、山内学府長より祝辞が贈られました。

記事: 柳 志暁(博士課程・編集部)

令和5年度 修士・博士課程合格発表(2023年4月入学)

2022年8月26日、令和5年度修士・博士課程(夏季募集・2023年4月および2022年10月入学)の合格発表がありました。出願者数は修士課程251名、博士課程18名でした。最終合格発表者は表の通りです。

修士課程最終合格者数		博士課程最終合格者数	
社会情報学コース	17名		
文化・人文情報学コース	14名		
先端表現情報学コース	29名	先端表現情報学コース	2名
総合分析情報学コース	18名	総合分析情報学コース	3名
生物統計情報学コース	6名		
合計	84名	合計	5名



活躍する若手社員をどう育てるか 研究データからみる職場学習の未来

山内祐平(編・著)
発行年月:2022年1月 出版社:慶應義塾大学出版会

この本は東京大学大学院情報学環と株式会社マイナビの共同研究もとに執筆されています。特にパーソナリティ・思考のモデリング・ジョブクラフティングという新しい観点から、活躍する若手社員を育てるポイントについて解説しているので、若手人材の育成に関心のある方に読んでいただければ嬉しいです。(教授:山内祐平)



学習の生態学 リスク・実験・高信頼性

福島真人(著)
発行年月:2022年3月 出版社:筑摩書房

本書は2010年東京大学出版会版を文庫化したものである。前半は認知学習理論の再検討を通じて「学習の実験的領域」という考えを呈示し、後半は精神病院、救急医療、原子力発電所といったリスクな現場の具体的分析である。科学社会学の起源についての論考もある。当事者学で有名な熊谷晋一郎さんによる詳細なあとがきあり。(教授:福島真人)



気象データ分析の高度化と ビジネス利用

越塚 登(著・監修)
発行年月:2022年6月 出版社:NTS

気象データは社会や生活のあらゆる面の基盤であり、防災や災害対応をはじめとして、事業価値の向上や経済性の実現、顧客サービスの品質向上、生産性や品質の向上など、日常的な経済活動、さらには、グリーン社会の実現のために、大変重要であります。本書では、気象データに関する取組や技術、知見を紹介しています。今後のデータ駆動型社会における気象データ利活用の推進に本書がお役にたてれば幸いです。(教授:越塚 登)



空爆論 メディアと戦争

吉見俊哉(著)
発行年月:2022年8月 出版社:岩波書店

「視ること」は「殺すこと」である——支配し、侵略し、殺害する「上空からの眼差し」としての空爆は、第一次世界大戦や日本空爆、朝鮮空爆などを経て、いかに変容し、遠隔爆撃ドローンや現在の戦争における空爆の眼差しへと至ったのか。ウクライナ侵襲まで一貫してつながる「メディア技術としての戦争」を問い直す一冊。(教授:吉見俊哉)



テレビ番組制作会社のリアリティ つくり手たちの声と放送の現在

林 香里・四方由美・北出真紀恵(編)
発行年月:2022年8月 出版社:大月書店

本書は、番組制作会社所属のアシスタント・ディレクター、ディレクター、プロデューサーたちへのインタビューをもとに、テレビ番組の制作現場が抱える問題を明らかにし、放送の未来を考える。かつてテレビが好きだった人、いまでもテレビを愛する人、そして、昨今のテレビに幻滅している人には是非読んでいただきたい。(教授:林 香里)



集会的記憶と想起文化 メモリー・スタディーズ入門

アストリッド・エアル(著)／山名 淳(訳)
発行年月:2022年8月 出版社:水声社

拙訳書は「集会的記憶」と「想起文化」に関する諸研究を俯瞰する定評のある入門書であり、同時にその内容は専門家にもお読みいただける厚みのあるものでもあります。社会学、心理学、歴史学、芸術論、文学研究、メディア論など、扱われている学問分野は幅広く、訳業を通じて私自身が非常に多く学びました。(教授:山名 淳)



広報・PR論 パブリック・リレーションズの理論と実際 改訂版

関谷直也・菌部靖史・北見幸一・伊吹勇亮・川北真紀子(著)
発行年月:2022年9月 出版社:有斐閣

2014年に出版した『広報PR論』の改訂版。災害、新型コロナウイルス感染拡大、ウクライナ侵襲などにおいて、目的を持ったコミュニケーション、プロパガンダという観点から、メディアやコミュニケーションを考える視点は重要です。なお戦後に広報、世論調査を導入した小山栄三氏は東京帝国大学新聞研究室(新聞研究所、社会情報研究所の前身、現教育部)の第1回生です。(准教授:関谷直也)



フェミニズムとレジリエンスの政治 ジェンダー、メディア、そして福祉の終焉

アンジェラ・マクロビー(著)／田中東子・河野真太郎(訳)
発行年月:2022年9月 出版社:青土社

本書は英国カルチュラル・スタディーズの第一人者アンジェラ・マクロビー氏の初訳書になります。反福祉主義と自己責任化というネオリベラリズムのイデオロギーが容赦なく降り注ぐ現代社会において、新たに編成される女性性の問題に、ポストフェミニズムとメディア文化の観点から迫る本書をぜひお手にとってみてください。(教授:田中東子)

<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp>

【あとがき】

以前であれば学生同士の交流の中で自然に共有されていた暗黙知を得られる機会が減り、学府生活に思いもよらぬ不便が生じているようだ。一方、一定の制限を残しつつも、対面での授業やシンポジウム、制作展が再開されつつある。今号のニューズレターには、新型コロナ禍が長引く中であらわになった課題とこれまで止めることを余儀なくされてきた動きが徐々に再開しつつある現実とが垣間見えます。あらゆることが棚上げされた特異な時空間。その中で起きてきた静かで急速な変化を、一つずつ棚卸しし整理しなおす作業がこれから始まっていくのでしょう。学環・学府の研究や教育がその作業に貢献しつつ、より実り多いものになっていくことを願っています。(開沼 博)

GAKKAN 59 2022.11

東京大学大学院 情報学環・学際情報学府

Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 mail: news@iii.u-tokyo.ac.jp

編集委員: 開沼 博、神谷説子、韓 燦教、山内隆治、柳 志岐

デザイン: マルヤマデザイン(丸山智也、野中優衣)